

VBマイグレーション セミナーレポート (最新ユーザ事例のご紹介)
 ～ Win7/Win2008サポート終了へ、いかにユーザーは取り組んだか ～

VisualBasicから.NETへの具体的な移行事例

住友金属鉱山株式会社様に学ぶ！

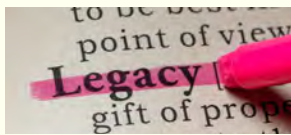
WindowsレガシーシステムのVBマイグレーションシナリオ

9月19日(木)にシステムズは、東京・日本橋のTKP 東京駅日本橋カンファレンスセンターにて「VBマイグレーション最新事例セミナー Win7 / Win2008サポート終了へいかにユーザーは取り組んだか 住友金属鉱山様に学ぶ！

Windows レガシーシステムのVBマイグレーションシナリオ」

と題した最新事例セミナーを開催、大盛況を博しました。Windows 7とWindows Server 2008の延長サポートが2020年1月終了と、いよいよ期限が近づいてきました。それに伴い、レガシーシステム上で構築されたシステムの改修問題が先延ばしできない状況になりつつあります。問題解決の手法として注目を集めるのが「VB(Visual Basic)マイグレーション」です。

今回のセミナーでは、VBアプリ資産を「VBマイグレーション」によって移行した当社のお客様に登壇していただき、移行に伴う実例をお話ししていただきました。



第1セッション「DX時代を見据えたレガシーシステムの今後」

第1セッションではシステムズのレガシー黒沢による導入講演として「Windows7/ Windows Server 2008 R2のサポート終了まで残り半年、選択が迫られるVBレガシーの今後」と題し、VBの現状分析と今後とるべき選択肢、そしてVBマイグレーションの最新動向について解説しました。VB6.0資産の課題として「いつどんなタイミングで動かなくなるか分からない」というリスクが挙げられます。ハードの老朽化、サポートが終了した言語やOSのセキュリティリスク増大、といった問題に加え、古いシステムのブラックボックス化もネックになります。またAI、IoT、ブロックチェーン、AR/VR/MRなどといったDX(デジタルトランスフォーメーション)の推進によるデジタル化をレガシーシステムが阻害しているという問題も生じています。当社は、単純な移行に留まらず、現状を分析した上でVB資産に付加価値を載せた将来を見据えたご提案をさせていただき、マイグレーションの後ろ向きなイメージを変えていきたいと考えています。



第2セッション 住友金属鉱山の担当PMがご登壇！

「マイグレーションを実施してみたはどうだった？VB5時代の生産管理システムマイグレーション」

続いて第2部として住友金属鉱山株式会社(以下「SMM」)情報システム部のAP保守グループ・プロジェクトマネージャーである飯野 昭氏にご登壇していただきました。飯野氏は社内のWindows 10環境への移行に伴い、2000年に開発されたVB5ベースのクライアントサーバ型生産管理システムの再構築プロジェクトを指揮した方です。今回のマイグレーションはVB側で40万ステップというスケールと、開発から20年近く経過しているという点から困難が予想されました。当初はフルスクラッチ開発での新システム構築を模索していたとのことですが、要件定義を進めたところ、予算と納期が超過してしまうことが判明したといえます。プロジェクトが走り出してから約1年が経過した頃、当初の予定を破棄して急遽マイグレーションによる改修に舵を切ったと説明がありました。

ベンダー選定とプロジェクトの進め方

マイグレーションによる改修方針に変更後、ベンダー数社に見積を依頼したところ、残り約1年で実施できるため当初計画納期に間に合うことが判明しました。社内で作成した委託先の評価表を活用し、ヒアリングシートによる概算見積と、ソースを提供した上での詳細見積を経て、条件内に収まるシステムズへの委託を決定したとのこと。移行の方針はVB5からVisual Studio 2017に開発環境を置き換え、DBもOracle9iから12gにすることになりました。移行の手順としてはシステムズからの提案で、移行性検証、本移行の2つの段階を踏んで進められました。



お問い合わせはこちらまで・・・

株式会社 **システムズ**

03-3493-0032 (VBマイグレーション担当)
 migration@systems-inc.co.jp
 創業50th記念サイト: systems-inc.com



VisualBasicから.NETへの具体的な移行事例

住友金属鉱山株式会社様に学ぶ！
WindowsレガシーシステムのVBマイグレーションシナリオ

一部機能を先行して試験移行することにより実現性を検証

まず移行性検証では10機能程度を選定してマイグレーションを行い、見込みどおりの移行が可能か検証。本移行で残りの部分をマイグレーションとしました。期間として移行性検証に2カ月、本移行に6カ月要しました。大まかな作業分担として開発はシステムズが担当し、SMM側はテスト仕様作成とテストに従事。ただし、IHOS環境での単体テストはシステムズが担当し、受け入れテストと結合テストはSMM側が行いました。両者が関わる部分はわずかでした。マイグレーションの結果、ほぼスケジュール通りに進行しコストも見積もり内に収まったとのこと報告。当初は操作や外観などがかなり変わることを覚悟されていたようですが、現行システムと見分けがつかないレベルでの移行を達成しました。逆に既存システムと区別するため、あえて立ち上げ時の背景色を変えたほどだったといえます。



テスト時の新旧差異について

テスト時の新旧の差異件数は78件。その大半は開発プラットフォームがVisualStudio 2017に変わったことによる軽微なもので、業務に支障がないものは許容したそうです。業務上差し障りの出そうな13件はシステムズが個別の回避策をとり、成果物の品質は納得できるものだったとのこと。

運用時の状況としては印刷物や画面の文字欠けが発生するなど小さなバグを含め33件発生しましたが、納期遅延につながるようなものは発生せず、緊急の障害も常駐したシステムズのエンジニアが対応したため、1カ月程度で解消となりました。



マイグレーション実施時の課題

一方、飯野氏は今回のマイグレーションの課題として次の3点を挙げています。

- (1) マイグレーション実施中のシステム改編が不可であった
- (2) コスト・納期の面で全テストすることが不可能であったため、些末なバグの許容を必要とされた
- (3) 分岐が複雑で隠し機能のようにテストから洩れる画面が見つかり、概要レベルの仕様書作成が必要だった

また、マイグレーションのデメリットとして、現状のシステムをそのまま移行するため、出来ることが変わらないこと、既存のバグも、そのまま引き継がれてしまうという点があげられました。

マイグレーション実施のメリットとユーザー側コスト

その反面、再構築に比べてコストを押さえることが出来、将来も継続して運用できること。さらにユーザーの負担が軽いことを利点としました。

投入した人材はSE2名、プログラマー1名、テスト担当1名の4名のみ。提出したマテリアルは現行ソース、新開発ツールライセンス、概要仕様書、単体テスト仕様書、結合テスト仕様書、業務フローのシナリオ。負担したコストはマイグレーション費用のみとわずかな負担で済んだと話しました。現在に至るまでシステムは安定稼働中で、クライアントPCをWindows10へ置き換えた後も障害は発生していないそうです。

VB5時代に比べて開発環境こそ変わりましたが、開発者教育を実施してもらい、大きな混乱もなく移行できている、と満足そうでした。当初は新規開発を指向していたため回り道してしまったとのことですが、「最初からマイグレーションにすれば良かった」と飯野氏。現在は、凍結していた大規模なシステム改編を再開し、マイグレーションで抑えた予算を改修に廻しているようですが、この開発には当社も協力しています。最後に飯野氏は、「これまでで一番平和なシステム切り替えでした」と話してマイクを置きました。

第3セッション「Windows7・Windows Server 2008/R2のサポート終了間近！VBレガシーの再生・再活用をVBマイグレーションによる変換デモとプロジェクト事例で解説」

最後は当社のブイビー坂倉利幸が、実際に画面を映しながら、ツールによる変換工程のデモンストレーションを行いました。業務システムのマイグレーションでは数千から数万というエラーが発生します。これに対して手作業のモグラ叩きで対処すると、さらなるトラブルが発生することを指摘。解析に基づいた変換パターンチェック、画面・帳票項目チェック、出力データコンペア、動作を比較確認するシナリオチェックの4つの比較検証テストについて解説し、高度なノウハウをもつベンダーならではの方法論を披露して締めました。セッション後の質問では、「発見された既存のバグへの対応は？」など現場に立つユーザーならではの熱心な質問が飛び交いました。また、終了後は、講師に対する問い合わせの列が見られるなど大成功のうちに幕を閉じました。当社ではDXデジタルトランスフォーメーション時代を迎え、今後も企業のレガシー化とブラックボックス化が進む塩漬け状態のシステムからの脱却に役立つ、モダナイゼーションセミナーを開催していく予定です。



お問い合わせはこちらまで・・・

株式会社 **システムズ**

03-3493-0032 (VBマイグレーション担当)
migration@systems-inc.co.jp
創業50th記念サイト: systems-inc.com



@sys.jp



@systems_jp

